

考古資料としての瓦

大阪歴史博物館学芸員 岡本健

はじめに

考古資料としての瓦とは…

- 瓦が用いられる施設(都城・寺院・城郭…)の造営や、それに伴う生産に関して、様々な情報を読み取ることができる考古資料。
- 寺社・城郭に使用が限定されることから、権力者との関わりの文脈で論じられる歴史資料。権力の象徴としての役割。
- もと古代瓦が研究の主流。1990年代以降、対象が中世・近世に拡大。
- 中世・近世における瓦生産に関する文献史料は寡少。考古資料の分析が重要。

中世・近世移行期では…

- 中世瓦研究と織豊期城郭瓦研究の分離
しかし、初期の城郭瓦は寺院瓦と密接に関係する
織豊期城郭瓦が中世瓦工の技術を前提に成立したことは明らか。
⇒「中世瓦」と「織豊期城郭瓦」の橋渡しとなる「戦国期瓦」を研究する必要性。

大阪から徳島(阿波)の瓦を見る視点とは…

- ①瓦の特徴の共通性 ②四天王寺の瓦工の活躍 ③三好氏の支配
⇒本講座では、勝瑞城館跡出土瓦などの阿波とその周辺地域の瓦を、近畿の事例と比較しながら紹介する。

1. 瓦を分析する視点と方法

- 瓦の生産から使用に至る過程には様々な形態が存在した(上原1997)。
①遠隔地輸送(居職) ②出張製作(出職) ③近隣供給(図2)
- 従来から着目されてきた瓦当文様の類似性だけでなく、数量・出土状況・製作技法・使用痕跡などの諸属性を総合的に検討することで、瓦の生産・供給・使用の様子を考える。

2. 戦国時代前半の瓦供給の一事例 一葉堂城跡(感応寺跡)出土の瓦から一

(1)概要 ※一葉堂城跡の発掘調査成果は兵庫県教委1992を参照

中世感応寺 安政4年(1857)成立の『味地草』に記載

感応寺梵鐘銘に「文明七年」(1475)の記載

豊臣期一葉堂城 石川紀伊守光遠(光春)の築城とされる(『味地草』『淡路草』)

石垣の特徴が慶長期にあたるとする見解(北垣1992)

(2)瓦を出土した遺構

①瓦窯 形式は窖窯

焼成後に窯から取り出されず放置された瓦の群
ただし、屋根に葺く際の調整痕跡がある個体も。

②堀 寺院に伴う堀か

主郭側から流入した焼土層と、瓦を多量に含む整地層によって埋没
瓦は中世感応寺段階がほとんど。ただし豊臣期以降の瓦を少量含む。

(3)瓦の特徴

軒丸瓦・軒平瓦それぞれ4種類 阿波・淡路で同文瓦が採集される。(図3)

瓦当接合部に施すカキメ(カキヤブリ)を施す個体と、施さない個体。

参考:「明応」(1492~1501)銘を持つ新宮山遺跡例では、カキメを施す(岡本 2020)

軒平瓦 A・B・C 型式について

・顎後縁を面取りする特徴を持つ。

←顎後縁面取りは大和の瓦工の特徴とされる(田中 2004、山下 2017 など)

・平瓦部凸面の帯状横棧の特徴が法隆寺など大和の寺院と共通するとの指摘(山崎 2008)

・一方、同文瓦に注目すれば、淡路・阿波に分布する

⇒(一)大和の瓦工が出張製作で一定の期間淡路・阿波で活動した。

(二)在地の瓦工が大和の瓦工の技術を学んで製作を行った

などの解釈が可能であり、いずれにしても大和の瓦工との関りを認めるべき。

軒平瓦 D 型式のみ、

①顎後縁を面取りしない②使用痕跡を持つ③瓦当面に「石」の字

⇒鳥飼八幡宮からの転用瓦か

鬼瓦について

「大工天王寺小野光仙」の鬼瓦(図4)が積極的に評価されてきた経緯

ただし、鬼瓦と軒瓦の組み合わせは検討できない。

⇒少なくとも天王寺にゆかりがあると称する瓦工が活動したことは事実

参考:淡路・阿波における「天王寺」銘文の存在の指摘(田中 1995・山崎 2008)

彼らと四天王寺とのかかわりは?

○15世紀の段階で瓦工集団が座を組織して四天王寺に所属(大澤 2010)

⇒淡路に瓦を供給した集団も、四天王寺の瓦座を構成する集団?

○一方、淡路と四天王寺が地理的に離れていることを評価するならば、四天王寺との関係に否定的な解釈を与えることも可能

⇒自称にせよ他称にせよ四天王寺とのつながりをアイデンティティとする瓦工の活動が指摘でき、四天王寺が瓦の生産・供給に一定の求心性を有していたといえる。

3. 勝瑞城館跡の瓦

(1)勝瑞の概要

- ・細川氏の守護所であり、遅くとも明応年間(1492～1501)には成立(須藤 2017)
- ・三好氏が台頭し、実休・長治・存保と続く。
- ・天正 5 年(1577)以降、長宗我部氏・大坂本願寺の浪人・織田氏・三好氏等の勢力が入る。
- ・天正 10 年に長宗我部氏の侵攻で存保が讃岐に撤退し、廃絶。

①勝瑞館跡 (藍住町教委 2020)

- ・大規模な濠で囲まれた、複数の曲輪からなる館。
- ・遺物包含層から出土した瓦の数が、グリッドごとにカウントされており、その成果を利用して出土分布図を作成(図 5)。
- ・調査区の隅々から瓦が出土。なかでも、礎石建物 SB1001 付近で突出して瓦の出土が多い。
- ・SB1001 周辺で出土した瓦は雁振瓦を含み、雁振瓦による棟瓦の建物が想定できる。
- ・瓦組の井戸の検出もある。
- ・大型丸瓦の出土。建物に使用された瓦とすれば、大型の建物が想定可能。

②勝瑞城跡 (重見 2014)

- ・勝瑞館跡に隣接する単郭の城跡。
- ・発掘調査の結果、勝瑞廃絶の天正 10 年(1582)の直前に築城されたと判明。
- ・曲輪北西隅の土塁を伴う堀の肩から瓦が多量に出土。
- ・勝瑞館跡では 1 点も確認されていない軒瓦を多量に含む。(図 6)

(2)勝瑞城跡出土軒平瓦について

【着眼点】

瓦当接合技法：瓦当貼り付け・顎貼り付け

布目痕：あり・ナデ消し

瓦当上外区外縁：面取りする・面取りしない

瓦当文様：花唐草文・連珠文・青海波文・宝珠青海波文

A 型式(11 点)：瓦当貼り付け・あり・面取りしない・花唐草文

B 型式(3 点)：瓦当貼り付け・あり・面取りしない・連珠文(界線あり)

C 型式(1 点)：瓦当貼り付け・あり・面取りしない・連珠文(界線なし)

D 型式(2 点)：顎貼り付け・ナデ消し・面取りする・青海波文

E 型式(5 点)：顎貼り付け・ナデ消し・面取りする・宝珠青海波文

⇒2 群に分けられる。近畿の瓦を参考に年代を比定。

I 群：A・B・C 型式 14 世紀～15 世紀初め 寺院等からの転用瓦か

参考：法隆寺編年(佐川ほか 1992)、総持寺編年(芦田 1998)

II 群：D・E 型式 16 世紀後半(天正 10 年(1582)以前) 勝瑞城築城時の新調瓦か

参考：新宮山遺跡の瓦など

阿波・淡路の諸遺跡との同文関係(図 7)

丈六寺(徳島市)、光勝院(徳島市)、地藏寺(板野町)、桂国寺(阿南市)、
木津城跡(鳴門市)、徳島城下町跡(徳島市)、河上神社(洲本市)、
長寿院跡(南あわじ市)

⇒阿波・淡路に瓦を供給した瓦工集団の存在が想定できる

Cf. 撰津・河内も同様の状況(図 8)

大坂本願寺・若江城・久宝寺寺内町・勝龍寺城など

4. 三好氏の城郭の瓦

(1)飯盛城跡(大東市教委・四条畷市教委 2020)

・木沢長政の居城として享禄 3 年(1530)に史料上に初めて現れる。永禄 3 年(1560)に三好長慶が入城する。永禄 12 年(1569)から翌年ごろに廃城。

・V 郭(御体塚郭)では瓦が出土。軒瓦がないことから、棟部が瓦葺の博列建物が立っていた可能性を想定。

⇒軒瓦以外の瓦(雁振瓦を含む)や塼が出土していることが勝瑞館跡と共通。

(2)若江城跡(若江遺跡)(東大阪市文化財協会 1988 など)

・永禄 12 年(1569)ごろ三好義継により築城。天正元年(1573)に落城し、織田氏の支配下となる。天正 8 年(1580)ごろ廃城。

・主郭南西隅の堀から瓦・壁下地・礎石がその順番に堆積している状況が検出。

・平瓦部凹面に筋状の漆喰痕跡(岡本 2018)

主郭南西隅に存在した瓦葺礎石建物を解体し堀に投棄したものか

⇒郭の隅部から軒瓦を含む瓦が多量に出土した状況は、勝瑞城と共通。

三好氏による瓦の本格的な使用は、16 世紀後半に下るか。

おわりに 勝瑞を含む阿波・淡路の戦国期瓦から何がわかるのか

(1)生産

○窯から

勝瑞の瓦を焼いた窯は発見されていない

勝瑞を遡る感応寺では、瓦窯を検出 ⇒ 出張製作による瓦生産か

○同範・同文瓦から

戦国時代を通じて、阿波・淡路に分布 ⇒阿波・淡路に瓦を供給した瓦工の存在

○銘文から

- 阿波・淡路で「天王寺」「四天王寺」銘の存在。
※感応寺では、大和と共通する特徴の瓦あり
※青海波文様の共通性(摂河泉・紀伊・讃岐・播磨など)
⇒畿内(四天王寺と大和)と在地(阿波・淡路)との複雑な関係性

(2)使用

- 勝瑞城館と、同時期の畿内の城郭(飯盛城・若江城)で共通する要素を持つ。
戦国期全般 棟瓦の使用
戦国末期 軒瓦の使用 総瓦葺建物か
- 戦国末期に軒瓦を導入したのが三好氏とすると、再末期の三好氏の城郭の特徴と位置づけできるか
- 織豊系城郭の影響の可能性(勝瑞城については重見 2017 で指摘される)

参考文献

- 藍住町教育委員会 2020『史跡勝瑞城館跡Ⅰー勝瑞館跡西半部の発掘調査ー』
芦田淳一 1998「総持寺出土の中世瓦ー瓦当接合技法を中心にー」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』Ⅰ
上原真人 1997『瓦を読む』講談社
大澤研一 2010「摂津国四天王寺の職人」『中世東アジアにおける交流と移転ーモデル、人、技術』国立歴史民俗博物館
岡本 健 2018「中世末期摂津・河内周辺の同範瓦ー河内若江城跡出土軒平瓦を中心にー」『実証の考古学 松藤和人先生退職記念論文集』同志社大学考古学研究室
岡本 健 2019「大坂本願寺期の瓦ー大坂城跡と若江城跡の同範瓦ー」『大阪文化財研究研究紀要』第20号
岡本 健 2020「新宮山遺跡出土の瓦について」『交野市文化財だより』第31号、交野市教育委員会
岡本 健 2021「淡路叶堂城跡(感応寺跡)出土瓦の再考ー戦国期天王寺瓦工の特質解明に向けてー」『大阪歴史博物館研究紀要』第19号
岡本 健 2022「阿波勝瑞城館跡出土瓦についてー戦国期天王寺瓦工の特質解明に向けて(2)ー」『大阪歴史博物館研究紀要』第20号(近刊)
北垣聡一郎 1992「叶堂城の石垣遺構について」『叶堂城跡 三原川激甚災害対策特別事業に伴う発掘調査報告書』兵庫県教育委員会
佐川正敏・毛利光俊彦・花谷浩 1992『法隆寺の至宝 瓦』小学館
重見高博 2014「発掘調査から考える勝瑞」『勝瑞 守護町勝瑞検証会議報告書』藍住町教育委員会
重見高博 2017「発掘調査から考える守護町勝瑞の範囲と構造」石井伸夫・仁木宏編『守護

所・戦国城下町の構造と社会—阿波国勝瑞—』思文閣出版
須藤茂樹 2017「文献史料から考える守護町勝瑞」石井伸夫・仁木宏編『守護所・戦国城下町の構造と社会—阿波国勝瑞—』思文閣出版
大東市教育委員会・四条畷市教育委員会 2020『飯盛城跡総合調査報告書』
田中幸夫 1995「播磨を通過した四天王寺系工人」『織豊城郭』第2号、織豊期城郭研究会
田中幸夫 2004『播磨の中世瓦』私家版
東大阪市文化財協会 1988『若江遺跡第27次発掘調査報告』
兵庫県教育委員会 1992『叶堂城跡 三原川激甚災害対策特別事業に伴う発掘調査報告書』
浪花勇次郎 1973『阿波国古瓦拓本集』
山崎信二 2008『近世瓦の研究』同成社
山下大輝 2017「中世末大和の在地工人による瓦生産」『奈良歴史研究』第88号、奈良歴史学会

図版出典

- 図1 関連遺跡位置図：地理院地図をもとに作図
- 図2 瓦供給模式図：上原 1997をもとに作図
- 図3 叶堂城跡(感応寺跡)を中心とする阿波・淡路の同文瓦：岡本 2021
- 図4 叶堂城跡(感応寺跡)出土鬼瓦：兵庫県教育委員会 1992
- 図5 勝瑞館跡西半部 遺物包含層における瓦出土分布図：藍住町教委 2020より作成
- 図6 勝瑞城跡出土軒平瓦：岡本 2022
- 図7 勝瑞城跡を中心とする同文関係：岡本 2022
- 図8 摂津・河内周辺における同範・同文瓦：岡本 2019